

学会の動き

「平成24年7月九州北部豪雨による災害調査団合同報告会 —繰り返される豪雨災害への備え—」開催報告

地盤工学会 平成24年7月九州北部豪雨による災害調査団

1. はじめに

去る2013年5月10日（金）に「平成24年7月九州北部豪雨による災害調査団合同報告会 —繰り返される豪雨災害への備え—」を福岡市の九州大学医学部百年講堂にて開催しました（口絵写真—16, 17）。主催者側の予想を大きく超える315名の方々が参加され、活発な報告、討論を交わしました。本報告会は、昨年7月に福岡、大分、熊本の各県を中心に発生した豪雨災害について、主に地盤関連の調査を行った地盤工学会災害調査団が、主に河川関連の調査を行った土木学会西部支部と土木学会水工学委員会の災害調査団と共同で開催したものです。強く関連しつつも、異なる分野の立場からみた調査結果を同じ場で報告することで、新たな知見を得ようという試みです。

2. 報告会の概要

3時間半に亘る報告会は、8件の調査報告と1件の基調講演、最後に参加者も交えた総合討論の構成で行われました（表—1）。第1セッションでは、初めに九州大学助教の西山浩司先生より、気象の観点からみた豪雨発生前の特徴について、「クラウドクラスター」や「テーパーリングクラウド」といった線状もしくは塊状の降水系が発生した数時間後に、今回の災害が発生したことが報告されました。続いて、九州大学准教授の笠間清伸先生より、今回の災害の全体的な特徴を地盤工学の視点から説明がなされた上で、熊本大学教授の北園芳人先生より阿蘇外輪山の北側を中心に発生した斜面災害について、株式会社ダイヤコンサルタント技師長の矢ヶ部秀美氏より矢部川上流における斜面災害について、それぞれ報告されました。阿蘇地方での土砂災害の特徴として、表層崩壊と多量の雨水による土石流の発生が各所で確認されたこと、矢部川での土砂災害の特徴として、三郡変成岩類の強風化部や崖錐堆積物の表層崩壊ならびに地すべりの発生が多かったことがそれぞれ挙げられました。

休憩をはさんだ後の第2セッションでは、前セッションに続き九州大学大学院生の坂田賢亮氏より、矢部川流域における流木の氾濫とその堆積状況について、上下

流での差異や障害物による遮蔽傾向の報告がありました。続いて、大分工業高等専門学校准教授の工藤宗治先生より、山国川における斜面災害と堤防被害について、九州工業大学准教授の重枝未玲先生より、山国川・遠賀川の浸水及び護岸等の被災状況とそのプロセスの検討について、それぞれ報告されました。その中で、今回の集中豪雨をもたらした雨雲が当該河川に沿って発生した影響が大きいこと、今後護岸等の河川構造物が出水時に被害が生じる可能性が高い区間の水位のモニタリングを強化する必要性について、ご指摘がありました。

九州大学准教授の矢野真一郎先生より、以上の報告の総括がなされた後、九州工業大学教授の秋山壽一郎先生による「矢部川の堤防決壊 ～原因究明と河川堤防の安全性評価の難しさ～」と題した基調講演も行われ、様々な要因が複合的に発生し、影響を及ぼして生ずる堤防の安全性評価の考え方について、河川工学の研究者の立場から提案がなされました。

最後に、土木学会調査団団長を務められた九州大学特命教授の小松利光先生がコーディネータとして、総合討論が行われました。会場の参加者より質疑やコメントが活発に飛び交い、みなさまの関心の高さがうかがえました。

3. おわりに

昨年7月の災害発生から、約9カ月に及ぶ現地調査、結果の分析ならびに報告書作成の末、今回の報告会の開催に至りました。「これまでに経験したことのないような大雨」と称される今回の豪雨に対し、土木学会と地盤工学会が共同で調査、報告を行ったことは、今回の豪雨災害のような異なる分野にまたがる事象において、複数の学協会が協力して対応する必要性や意義を、調査団メンバーも含め参加者のみなさまが再認識する場となったものと思われます。最後に、この災害でお亡くなりになった方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、今回の調査結果が少しでも活かされ、同様の被害を抑える取り組みが進むことを望みます。

（文責：長崎大学 杉本 知史）

（原稿受理 2013.5.29）